

2022. 10. 23. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書10章13～16節  
『悔いるところ』

「悔い改めない町を叱る」という小標題で本日の箇所は始まります。

13節のコラジン、ベトサイダ。そして15節のカファルナウムというのはガリラヤ湖周辺に位置するユダヤ古来の町々です。ユダヤ教の伝統を重んじるこれらの町に対して、イエスは「悔い改めない」として叱るわけです。

村社会という言葉があります。因習やタブーを軸にして村人以外の新参者を容易に受け入れようとしない保守的な社会ということでしょう。そういう社会ではどうしても多数の論理が支配し、少数の異教の者たちを差別・抑圧してしまいがちです。

それに対してティルスやシドンという町は港町でした。物流は様々な人々を誘います。文化や言語、さらに新しい価値観が次から次へともたらされます。

ですから、コラジン・ベトサイダ・カファルナウムの人々はティルス・シドンの人々を律法のない「罪深い町」と決めつけて蔑視していたのです。

これら三つの町はイエスの活動の場でした。つまり、初代教会はこういったユダヤ教の伝統が支配する町から次第に異教の町とされる開放感溢れる交易都市へと活動の場を広げて行ったというより、移していったのは自然のことだったと考えられます。

10章の「72人を派遣する」記事でも保守的な町での受け入れられ難さが記されています。

このように「自分と異なるもの」と線引きをして関わろうとしないばかりか、見下すような生き方に対してイエスは厳しく非難されるのです。

本来、律法というものは神の恵みに応えて生きる道を教えるものでした。つまり、生かされているという受け身の構えで生きる筋道なのです。それは人間の目標とすべき高さではなく、生かされることなしに生きえない人間の低さを教えるものです。道徳を犯すと悪い人になりますが、律法を犯すとは自分を誇る人にしてしまうのです。

こういう日常をおくるこれらの町に対して 15 節ではイザヤ書 14 章 13～15 節を引用して厳しい言葉が述べられます。更に 16 節でルカはオリジナルの言葉が付け加えます。これはイエスを拒否するガリラヤの町々への警告であり、そのような日常に生きる人々に対する破綻の警告でした。

当時の慣習化された律法理解をわたしたちは無関心に素通りしてはなりません。わたしたちにも当てはまるものばかりなのです。それは時を越えてわたしたちの持つ「信仰というものについての抜きがたい誤解」そのものなのです。わたしたちはともすれば信仰を非常時のこととして捉えてしまいます。病気の時、失意の時、困難な時、あるいは入学・就職・結婚・葬式等々。またはクリスマスとイースターだけなどというのがあります。そのような時にだけ信仰の出番があると考えていることです。しかし、信仰とは本来、ルカが生きた時代から日常の歩みを指します。わたしたちはどうやら日常を軽んじて生きがちかも知れません。ですが、たとえ不満であっても自分というものをきっちり引き受けさせ、日々の要求を果たさしめるのが信仰なのです。

イエスはその日常を問い直されます。

固定化した村社会で一つの意見だけに固執して引きこもってしまう生き方を悔いるところをもって改め、たとえ迷ったとしても多様な生き様に触れる方へと導かれるのです。